

ベルギー・オランダ語圏の作家と作品

著名な作家の作品を日本語で読んで、フランダース文化を味わって見ませんか？

フランス語圏のベルギー人作家といえば、リエージュ出身の推理作家ジョルジュ・シムノンや日本で育ったアメリー・ノートンを思い浮かべますが、オランダ語圏の作家はと聞かれても、すぐには答えられませんでした。そんな未熟な我々のために、公益財団法人フランダースセンターが、著名人の作品を翻訳して、日本語版を出版してくれました。



第1弾は、2013年11月に出版された「フランダースの声」です。ノーベル文学賞候補に幾度も名を挙げられたことのあるヒューホ・クラウスの「茂みの中の家」（三田順訳）をはじめ、ベストセラー作家トム・ラノワの「完全殺人（スリラー）」（鈴木民子訳）、デビュー作がベストセラーになったアンネリース・ヴェルベケの「グループでスキップ」（井内千紗訳）、児童文学の第一人者アンネ・プロヴォーストの「一発の銃弾」（板屋嘉代子訳）、独特のスタイルで脚光を浴びている若手作家クリストフ・ヴェーケマンの「正真正銘の男」（鈴木義孝訳）とジャンルの異なる5作家の作品を1冊にまとめています。翻訳者は、公益財団法人フランダースセンター主催のフランダース文学翻訳セミナーに参加された方々です。短編小説なので、読みやすく、作品を通してフランダース文学を知る手がかりになります。



そして、2016年10月に新たに2冊翻訳本が出版されました。エルヴィス・ペーテルスの「火曜日」（鈴木民子訳）とペーテル・テリンの「モンテカルロ」（板屋嘉代子訳）です。「火曜日」の作者エルヴィス・ペーテルスの本名は、ジョス・ベルローイで、彼はパンクロックバンドのヴォーカリストとしても活躍する多彩な才能の持ち主です。小説作者名は、彼の

名前のみが記載されていますが、実際には妻のニコレ・ヴァン・パールとの共同制作だそうです。この作品は、ベルギーでは2012年に発行されています。

2冊目の「モンテカルロ」は、ペーテル・テリンの6作目の長編小説として、2014年ベルギーで発行されています。彼は子どものころ、数学と化学が得意で、心理学にも興味を示していました。学校を卒業後、仕事を転々とし自分の道を探していました。23歳のとき、出張中にオランダ人作家ウィレム・フレデリック・ヘルマンズの「ダモクレスの暗室」（未翻訳）を一晩で読破し、執筆活動をすることにしました。なんと、この本を読んだ次の日に、会社に電話して辞職したそうです。その後、数々の文学賞にノミネートされたり、受賞したりしています。



ベルギーオランダ語圏の小説は、児童書以外あまり日本語に翻訳されていませんでした。これを機会に日本語でフランダース文化に触れ、オランダ語も学び、さらに文化に溶け込んで行くのも、ベルギーを知る楽しい作業ですね。時間は自分で作るもの。プチポワスタッフも、少しずつオランダ語を勉強して、さらにベルギーの知識を増やし、みなさんに紹介したいと思います。

紹介の3作品は、共に松籟社から発行されています。



公益財団法人フランダースセンター
〒180-0002
東京都武蔵野市吉祥寺東町4丁目2-2
www.flanders.jp/2016/10/bungaku.html